

多摩川の源流、瑞々しい森林の山・・・「笠取山」

笠取山

実施日 2014年7月13日(日)

天候 曇り

リーダー 遠井 謙策

参加者 若村貴世子、斎恵美子、若村勝昭、福島政幸、山崎富美恵、白石恵美子、遠井謙策、斉藤伸二郎、徳山敬子 計9名

費用 JR 2,288円(高尾駅起算)、タクシー代 4,440円

タイム 塩山駅(8:44タクシー)作場平(9:55)一休坂分岐(10:20)笠取小屋(11:25-12:05昼食)分水嶺(12:20)笠取山西山頂(12:55)笠取山本山頂(13:15)水干(13:45)黒槐分岐(14:25)中島川橋(15:25タクシー)塩山駅(16:30)

ブラジルが地元開催のW杯で歴史的な大敗を喫し、3位決定戦にも負けた日、曇天の塩山駅に降り立った9人のハイカーがタクシー2台に分乗した。くねくねくねくね喘いで登ること1時間、到着した登山口の作場平には既に沢山の自家用車。

バスも通わぬ奥秩父のこの山の入口の空気は、台風一過の灼熱地獄だった前日とは違い、冷氣すら感じるほど。蒸し暑さとの戦いを覚悟していた我々9人はちよっと拍子抜け。

ゆっくりと足慣らしをするように、整備された散歩道のような道を歩き出す。



濃さを増し繁茂しているミズナラや落葉松の森林は、春の清々しさはなにももの息づく力強さを感じさせる。木橋の下を流れるせせらぎが一種の

清涼感を与えてくれる。しっとりとした黄緑色の苔たちも生き生きとしている。緑の空間を楽しむうち一休坂分岐に着く。

ヤブ沢経由の迂回路もあるが、ここは健脚ぶし会、迷わず一休坂の急坂に行く。

吹き出る汗が一寸しょっぱい。平均年齢69歳は元気だ。泣き言一つ言わずに1時間強を登りきった頃、瀟洒な佇まいの笠取小屋が現れる。



水場があり、ベンチ・テーブルが用意された芝生広場で、足を投げ出し昼食を摂る。重い雲が相変わらず垂れ籠めるているが、時折りキビタキのさえずりが聞こえてくる。

後半戦へ向け歩き出し、ちいさな丘の上にある分水嶺に着くや間もなく、ついに来た!とうとう降り出してしまった。

慌てて雨具を取り出す。分水嶺とはこのように降った雨が分かれていくのだと、現実に降って目の前で教えてくれなくて



も・・・!? 荒川へ、多摩川へ、富士川へ、ほんの少しの差が流れ行く方向を決定していく。人生の出会いにも似た何やら人智を超えた運命的なものすら感じてしまう。ああ雨よ!

目の前には、三角おむすびの笠取山が立ちはだかり、おいでおいでをしている。

真っ直ぐに伸びた、そのまま天国へと続いているかのような急坂を登らねばならない。この日一番の試練の時。一步一步、歯を食いしばって登る。誰もが無言で、



このように登る。いつの間にか雨はやんでいる。頑張ること35分、西の山頂へ到達。360度ガスで真っ白、展望はゼロ。でもみんなの顔は晴れ

やかだ。岩と這松の隘路を越えて東にある本当の山頂へ。1,953mを極めた。

下山の途中、多摩川源流、一滴の始まりの「水干」へ寄り道。よくよく見たけど濡れは確認できなかった。でもしっぽり濡れているそのところがそうなのだろう。ここから東京湾まで138km長い旅が始まる。分岐へ戻り、シラベ尾根、黒槐両分岐を経由して深い森の中の緩やかな道を辿り、タクシーが待つ中島川橋へと下っていった。

花もなく展望も無い笠取山ではあったが、不思議と充実した価値ある山歩きが出来た気がしている。参加者の方々からも好印象であった旨のお言葉を頂いた。全員が駅近くの温泉「宏池荘」で汗を流し、一部の人たちで駅前で懇親。

いつもとは少しだけ違ったメンバー構成による山行はお開きとなった。

(記&写真・遠井謙策)